平成２７年１月２９日

事　業　経　過　報　告　書

文部科学省初等中等教育局長　殿

都道府県教育委員会等名　秋田県教育委員会
所　　在　　地　秋田県秋田市山王 3-1-1
代　表　者　職　氏　名　教育長　米田　進

平成２６年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

１．事業の実施期間

委託を受けた日　～　平成 27 年 3 月 31 日

２．強化地域拠点の学校名

ふりがな	あきたけんりつゆりこうとうがっこう	ふりがな	みやの　かえこ
学校名	秋田県立由利高等学校	校長名	宮野　加恵子
ふりがな	ゆりほんじょうしりつゆりちゅうがっこう	ふりがな	すだ　こうじ
学校名	由利本荘市立由利中学校	校長名	須田　晃司
ふりがな	ゆりほんじょうしりつゆりしょうがっこう	ふりがな	さとう　きよかず
学校名	由利本荘市立由利小学校	校長名	佐藤　清和

３．研究内容

（１）研究開発課題

児童生徒の英語コミュニケーション能力の育成を目的とした、小・中・高一貫した系統的な指導方法及びそのための教育課程編成、学習の計画・実行・評価を自己管理できる学習者のための評価方法の開発

（２）研究の概要

小学校から中学校、高等学校の英語学習を通して、４技能をバランスよく身に付け、英語で積極的にコミュニケーションを図ることができる人材の育成を目指す。そのため、学習到達目標をＣＡＮ－ＤＯリスト形式で設定し、ＰＤＣＡサイクルにおける位置付けを明確にしながら言語活動の一層の充実を図るとともに、効果的な教育課程編成による小・中・高を通した英語力の向上を図る。このことは、平成２５年度に本県で策定したアクションプラン（「英語力日本一」を１０年先に見据え、国際化が進む社会生活において必要とされる英語力を高等学校卒業時までに身に付けることを目標とする）の内容とも合致するものである。実際の授業では、児童生徒の発達の段階を踏まえ、場面や言葉の働き等に着目しながら４技能のバランスと指導手順を工夫した授業展開、文法構造への関心を高める指導の工夫、学習の計画立案・実行・評価を自分で行う力の育成等を系統的・計画的に実施する。

（３）現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

由利本荘市は、秋田県南部に位置する日本海に面した市である。農業と工業が一体となって発展してきた地域であり、近年では肥沃な土地と豊かな水に恵まれた特産物の生産振興を推進し、地域ブランド製品等を国内のみならず海外へも積極的に送り出している。そのため、地域の企業では、英語を使える人材、海外で即戦力となって活躍できる人材を強く求めている。

児童生徒においては、授業以外では英語を使う必然性に恵まれていない環境の中で、特に話すことについて間違いを恐れ、消極的になってしまう傾向が強い。本県が目指す「問い」を発する子どもの育成とも合わせ、児童生徒が英語で自分の考えや気持ちを伝え合うことの大切さや喜びを感じられるような言語活動を行うとともに、そのためのコミュニケーションへの意識が高まる学習課題の提示の仕方、計画・実行・評価を自己管理できる学習者のための評価方法の開発を行いたい。また、コミュニケーションにおいて、相手が理解できるように伝える工夫の不足や英語による情報交換や討論での深まりの不足が指摘されていることから、それらをＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標に十分に反映させ、小・中・高一貫した系統的な指導方法について研究していく。

②研究仮説

４技能をバランスよく身に付け、英語で積極的にコミュニケーションを図ることができる人材の育成に向けて、小・中・高の円滑な接続のための１０年間を見通した学習到達目標を設定し、計画的、系統的な指導及び見直しと改善により総合的な英語力の向上を図る。

小学校３・４年においては、週１時間の外国語活動を設定する。場面とイントネーションへの着目による感情を豊かにする音声指導により聴覚像を育成することや、日常で用いるカタカナ語の英語化による生活語彙の活用等を行うことによって、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるとともに、必然性のある場面設定を工夫することでコミュニケーション能力の素地を養うことができる。また、様々な国籍の学生が在籍している国際教養大学との年数回の交流を通して、英語であいさつや自己紹介をしたり、身近なものを英語で表現したりする機会をもつことは、コミュニケーションの楽しさや喜びを味わわせる最良の機会であると考える。

小学校５・６年においては、教科型の英語の時間を設定する（コマ数については（４）を参照）。小学校３・４年生で身に付けた音声等への慣れ親しみやコミュニケーションへの積極的な態度等を十分に踏まえ、口頭による表現から書くことによる言葉への意識付け、書いたことを読む活動と話したことを書く活動の順番や割合の工夫等を行うことによって、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や４技能のコミュニケーション能力の基礎を養うことができると考える。

中学校においては、オールイングリッシュによる授業を基本とし、小学校で育成されたコミュニケーション能力を踏まえ、さらなる言語活動の充実を図る。正確さと適切さのバランスのとれた指導を意識しながら、口頭による表現から書くことによる文法への意識付け、書いたことを読む活動と話したことを書く活動の順番や割合の工夫による論理的な表現活動等を行うことによって、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力の基礎を培うことができると考える。また、国際教養大学生との年数回の交流を通して、スピーチやディベートの基本を学ぶ機会をもたせることで、生徒が自分の思いや考えを適切な表現で相手にわかりやすく伝える力を育成することができると考える。

高等学校においては、小・中学校で行うすべての言語活動の高度化に加え、文法構造への関心を高める指導の工夫、作文での論理的な展開のための他者理論の援用の指導、従来型ＰＰＰ（Presentation→Practice→Production）の再検討等を行いながら、タスクを取り入れた活動の工夫により、英語を通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばすことができると考える。また、国際教養大学を訪問し、英語による講義を実際に受ける機会をもたせることによって、主に国際科の生徒の英語学習への意欲を高めたり、英語によるディベートや交渉など高度な言語活動に順応できる力を身に付けさせたりすることができると考える。

学習の計画・実行・評価を自己管理できる学習者のための評価方法の開発については、すべての校種、学年（小学校は５年生と６年生）において、ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした実際に児童生徒が自己評価及び相互評価する場面において使いやすく効果の上がるカードの開発、児童生徒の自己決定により課題を選ぶことができる教材の工夫、英語学習相談の実施、学年による語彙数の基準設定と獲得語彙数の把握等を行うことによって、児童生徒が自分のニーズや希望に役立つように、自分で選んで決めて計画し、それを実行して、実行した結果を自分自身で評価できるような知識やスキルが身に付くと考える。

③研究成果の評価方法

すべての学年において、前述の評価における児童生徒の変容から見取る。小学３・４年生においては、授業中の観察や自己評価カードの分析を中心に評価する。小学５・６年や中学校においては、県学力向上支援 Web の英語スピーキングテスト、県学習状況調査（中学校）等の結果を活用するとともにパフォーマンステストを年間計画に適切に位置付けて評価する。高等学校においては独自の評価問題を作成し結果を活用するとともに、上記同様のパフォーマンステストを年間計画に適切に位置付けて評価する。また、実用英語技能検定試験や TOEIC Bridge などの外部検定試験の結果を分析し、指導に生かしていく。

これらの結果を総合的に評価し、仮説で行われたことが英語力の向上につながったかどうかを判断する。また、年３回のアンケート調査を行い、学習の計画・実行・評価を自己管理できる学習者としての成長が見られたかどうかを判断する。なお、研究の経過については、随時各校のホームページ等で発信し、成果の普及を図る。

（４）研究開発型

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次
①小学校 外国語活動型	第３・４・５学年 １コマ	第３・４学年 １コマ	第３・４学年 １コマ	第３・４学年 １コマ
②小学校 教科型	第６学年 １コマ	第５・６学年 １コマ	第５・６学年 ２コマ	第５学年 ２コマ 第６学年 ３コマ

（５）研究計画（平成２６年度の進捗状況・課題）

【由利小学校】

第一年次　○中学年における「外国語活動型」の年間指導計画の作成と実践

○中学年外国語活動の実施と６年英語科の実施

３・４年生は週１コマの外国語活動を実施した。５年生は初めての学習となるため１コマの外国語活動、６年生は１コマの教科型（小学校英語科）を試みた。平成２７年度は５年生１コマ・６年生２コマの教科型を計画していたが、６年生にとっては教科型が初めてであり、外国語活動型としても１年間しか学習経験がないことから、児童の負担が大きいと判断し、両学年とも１コマに変更したい。２８年度は５年生も６年生も２コマの教科型、２９年度には６年生においては３コマの教科型の実施を目指す。

中学年の外国語活動では、どのような教材が適切であるかなど、年間指導計画の作成に試行錯誤した１年となった。文字として提示する英文の量が多いなど、児童の実態にそぐわない実践もあった。その反省を生かすとともに、学年間の系統性に配慮しながら、３月中には来年度の児童の実態に即した年間指導計画を完成させ、新年度に備えたい。

○児童の発達の段階に即した初年度の「教科型」の年間指導計画の作成と実践

今年度、本事業のスタートとともに年間指導計画の作成に着手したが、何もかも手探りの状態であったため、授業を実践しながら追加・修正を繰り返してきた。他県の先進校や由利中学校の指導計画を参考にして改良を重ね、今年度中の完成を目指したい。

教科型は初めての試みであったが、数回の授業研究会を通して、これからの小学校英語科の指導についての課題が見えてきたことが一番の成果と言える。ＣＡＮ－ＤＯリスト形式での学習到達目標（以下「ＣＡＮ－ＤＯリスト」）との整合性を図るとともに、中学校１年の学習との接続を意識ながら、「聞くこと」「話すこと」に「読むこと」「書くこと」の技能も加えた年間指導計画の完成を目指したい。

当初、外国語活動型から教科型になることで、学習意欲が低下することが懸念された。そうならないために、これまでの外国語活動の楽しさが失われないよう十分配慮して１単位時間の学習活動を工夫した。初めての書くことの活動においても、「英単語を知りたい。書けるようになりたい。」という気持ちが強く、今年度の６年生においては、教科型になっても意欲の低下は見られなかった。

○中学年における「外国語活動型」の題材や教材の開発

○「教科型」の４技能を統合した学習題材、教材の開発

○児童の発達段階に即した４技能の評価の在り方の研究（評価内容、評価方法等）

中学年においては、『Hi, friends!』や本校にある自作教材をもとに実践し、教材・教具を補充・累積していった。２学期になってからは、フォニックスや低・中学年向きの外国語活動の市販教材も購入し、３～６年生が週１コマ１年間学習する分は揃った。今後は、教材内容の重複や系統性等を踏まえながら、年間指導計画に適切に反映

させていきたい。また、English Roomの教具の整理、英語教材・指導案等のデータ資料の整理も行っていきたい。

今年度は、４技能においてどのような学習活動をどのように展開し、それをどう評価するのかという研究に深まりを欠いた面がある。４技能それぞれの到達目標を明確にし、適切な学習活動及び評価ができるように学校全体で取り組んでいく必要がある。

○小・中連携を図りながら「教科型」のＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標の作成

小学校英語科のＣＡＮ－ＤＯリストを中学校と連携しながら作成した。６年生では学習到達目標を意識した学習を展開することができたが、実践しながら手直ししていく必要があると感じている。具体的には、「話すこと」及び「書くこと」の評価方法については、今後特に研究すべきところである。

ＣＡＮ－ＤＯリストだけでなく、小・中学校で共通した「Classroom English 一覧」を作成し、使用することも決まっている。お互いの授業を見合う機会が増えたことにより、小・中学校の円滑な接続を意識した指導を充実させたいと考えたためである。

また、中学生が６年生の授業に参加したり、６年生が中学校の英語スピーチコンテストを参観したりするなど、児童生徒の交流も活発に行われた。「こんな中学生になりたい」「自分も中学生のように英語を話せるようになりたい」と感じた児童が多く、このような思いをＣＡＮ－ＤＯリストの項目に生かしていきたい。

○業間活動を活用した英語に親しむ時間の充実（全学年：週１５分１回から暫時増加）

金曜日の１５分の朝の活動に、全校「エンジョイ・イングリッシュ」を設定した。１・２年生には、ＡＬＴとイングリッシュサポーター（ＡＬＴとしての勤務経験がある地域人材）が入り、英語の活動を楽しむ時間としている。３・４年生はアルファベットの読み方や簡単な英会話の練習、５・６年生はフォニックスの学習などの時間に充てている。ＡＬＴ等が関わることで、ネイティブの英語に触れる機会が増え、英語に慣れ親しませることができた。その結果、１００％に近い児童が「外国語活動（６年生は教科型）がとても好き・好き」と回答するなど、この時間を楽しみにしていることがうかがえる。

来年度は、月ごとのテーマを設けるなど、１～６年生まで児童の実態に即した系統性をもった指導計画のもとで実施し、充実を図っていきたい。

○ＡＬＴや外部講師の効果的な活用

○地域人材の掘り起こしと活用

２学期からイングリッシュサポーターが指導に加わった。イングリッシュサポーターが、児童とＡＬＴ、学級担任とＡＬＴの間に入ることで、機能的に授業が展開された。また、英語指導や外国の文化について職員が気軽に質問することもできた。

○国際教養大学の学生との交流学習の推進

国際教養大学は、世界の様々な国から多くの留学生が学んでいる公立大学で、県内

の学校はもとより地域との交流にもたいへん積極的である。由利小学校では、平成２１年度より留学生との交流学習を実施しており、今年度は５年生が１回、６年生が２回の交流学習を実施し、知っている単語や英語表現を駆使しながら相手の思いを理解したり、自分の思いを伝えたりする学習を行った。なお、２月には留学生が由利小学校を訪問し、全校児童と関わったり、５・６年生の授業に参加したりする予定である。

交流学習を通して、課題も明らかになってきている。学習したての英文（例えば、What do you like～？）のみを使って一問一答で終わってしまう場合が多く、本来のコミュニケーションとは言い難い場面も散見された。研究協議会において、既習事項の中の何が使えるのか、英語で伝えきれない場合はどのような工夫が考えられるかなど、事前指導や交流の場の設定について研究していく必要があるという指導助言をいただいた。また、事前打合せの大切さについても痛感している。授業として成立するかどうかは事前打合せが十分にできるかどうかにかかっている。事前に留学生向けの依頼文（児童への対応の仕方等を含む）を指導案と共に送付するほか、当日に短時間でも打合せの時間を設け、活動の流れを確認してから活動に入るようにしたい。留学生はＡＬＴとは違う（「英語を教えた」経験がない方たちである）ということを意識して、指導者が中心となって活動をコーディネートできるよう、指導力の向上を目指したい。

国際教養大学留学生との交流以外にも、４～６年生が、High Coniscliffe CE Primary School（イギリス）とクリスマスカードの交換、６年生が Canton City School（アメリカ）とビデオレターの交換を通して、海外の子どもたちと交流を続けている。

○外部講師による教職員の英語指導に関する実技研修

本校では、開校当初から英語活動担当教諭が中心となって年１～２回の外国語実技研修を実施している。今年度は、国際教養大学の教員を招いて３回（８月・１１月・１月）の研修を実施した。授業の進め方の実際やクラスルームイングリッシュの活用方法などたいへん充実した研修となった。来年度は市全体の教職員対象の研修会を実施する予定である。

第二年次　○中学年における「外国語活動型」の年間指導計画の見直しと実践

○高学年における「教科型」の年間指導計画の作成と実践

○小・中連携を図りながら「教科型」のＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標の見直し

○「教科型」の４技能を統合した学習題材、教材の開発と実践

○積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる授業づくり

○小学校における学習スタイルの構築

○児童の発達段階に即した評価の在り方の研究（評価内容、評価方法等）

○学年の活動や学習内容と関連した業間活動の効果的な活用（全学年：週１５分１回から暫時増加）

○ＡＬＴや外部講師の効果的な活用

○国際教養大学の学生との交流学習の推進
○外部講師による教職員の英語指導に関する実技研修

第三年次　○小・中連携を図りながら「教科型」のＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標の見直し
○「教科型」の４技能を統合した学習題材、教材の開発と実践
○積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる授業づくり
○小学校における学習スタイルの構築と検証
○児童の発達段階に即した評価の在り方の研究（評価内容、評価方法等）
○学年の活動や学習内容と関連した業間活動の効果的な活用
○ＡＬＴや外部講師の効果的な活用
○国際教養大学の学生との交流学習の推進

第四年次　○小・中・高１０年間の英語教育を見通した小学校の学習内容の設定
○積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる授業づくり
○小学校における学習スタイルの構築と検証
○児童の発達段階に即した評価の在り方のまとめ
○学年の活動や学習内容と関連した業間活動の効果的な活用
○ＡＬＴや外部講師の効果的な活用
○国際教養大学の学生との交流学習の推進
○４年間の取組をまとめた冊子の作成

【由利中学校】

第一年次　○年間指導計画とＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標の見直し
小学校から中学校へ、また中学校から高等学校への接続を意識した改訂版ＣＡＮ－ＤＯリスト作成に向け、各校種と連携しながら現在協議中である。特に、今年度由利小学校６年生の児童が先行実施した教科型の内容（アルファベットの読み書き、フォニックスの指導など）は本校で作成したリストの初期段階（Level１）を先取りして学習しているため、小・中一体型の一覧の作成に向けて再検討中である。

○小・中の接続を踏まえた学習題材、教材の開発と実践
本校２年生が小学校を訪問し、６年生と合同で授業を行った。行動時刻を尋ね合う活動を通して、既習事項を活用しながら異校種間で教え合い、学び合う姿が見られた。また、教材については小・中共にフォニックスの機能を活用したものを使用している。１年生については入学後３時間、フォニックス指導の時間を設定し、小学校での学習との円滑な接続を図ることができるようにしている。

○生徒の英語に対する意識調査及び分析（６月、１１月実施）
意識調査を実施した結果、「英語の学習が好きだ」と回答した生徒は全校で８３％（前年７０％）おり、経年比較では１年生８３％、２年生８０％（前年６７％）、３年生８６％（前年７８％）と各学年とも意欲・関心の高まりが見られた。また、中学校の英語の学習で「聞くこと」及び「話すこと」において、小学校の経験が生かされ

ていると感じている生徒がどの学年でも８割を占めた。加えて、本校ではオールイングリッシュによる授業実践を継続しているが、外国語をインプットする力が身に付いてきたことを実感する生徒が増えてきていること、グローバル化を鑑み、ほぼ全員の生徒が外国語を学ぶ必要性を感じている（全校９７％）ことなどが分かった。

今後の課題は、生徒からいかに適切なアウトプットを多く生み出していけるかである。聞いたり読んだりしたことを理解し、それについての自分の思いや感想などを適切な表現を用いて話したり書いたりする活動を意図的に授業に組入れていきたい。

○中学校３年生英語授業でのティームティーチングを活用した授業実践

免許外の日本人教員とのＴＴ、またＡＬＴとのＴＴを継続して行っている。特に、免許外の日本人教員とのＴＴでは、間違いながらも一生懸命英語で伝えようとする教員の姿を見ることにより、生徒が間違いを恐れずに英語を話そうとする雰囲気が醸成され、学習意欲の喚起につながった。

課題としては、より綿密な打合せによるＡＬＴとの評価規準の共有が挙げられる。スピーキングテストは、ＡＬＴに習熟度を含めた生徒一人一人の実態を把握してもらい、共通理解を図った上で協力して実施していく必要があると感じている。

○ＡＬＴ及び外国人講師の効果的な活用の工夫とＩＣＴ化の推進

今年度はＡＬＴに加え、イングリッシュサポーターや英会話スクールの外国人講師を活用している。時にはＡＬＴ、イングリッシュサポーター及びＪＴＥ２名による１Ｃ４Ｔで授業を行い、ネイティブ同士の対話による導入も可能となった。また、ＪＴＥとＡＬＴが外国人講師の実技指導を受けることにより、フォニックスの指導の充実が図られるようになった。

課題は、ＡＬＴとの授業の事前準備が十分でないという点である。あらかじめ授業案を電子メールで送信しているものの、本時のねらいを達成するためにはどのような役割分担をし、それぞれが生徒にどう関わっていくべきなのか等、細部にわたっての打合せの時間が足りないと感じた。今後は、単元構成やパフォーマンステスト等の評価規準の確認などについてもＡＬＴと綿密に打合せをした上で授業に臨みたい。

○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）

２０１５年１月に行われる第３回英語検定では１・２年生の約半数が受験を希望しているため、２０１４年１２月末には、受験の有無に関わらず４級および５級の過去問を配付し、問題演習を行った。また、３年生では高校受検に向け、課外にあたる夏季休業中の学習会において３級レベルの問題に取り組んだが、第１回及び第２回検定試験の結果の検証と活用ができなかったことが大きな課題として挙げられる。

今後は、外部検定試験や県学習状況調査等の結果を踏まえ、生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業改善につなげていきたいと考えている。（検定試験の結果の詳細については、「評価計画」を参照）

○秋田県版スピーキングテストⅠ・Ⅱの実施及びその検証と活用（９月、２月）

本校独自で作成した計画及び内容でスピーキングテストを実施した。その内容は、単元のまとめとして教科書の音読テストを実施したり、ＡＬＴとテーマトーキングをしたりするものである。３年生で実施したテーマは「自分にとって最も大切なもの」で、教科書の題材で扱われているお絵描きイベントをＡＬＴと１対１で実際に体験した。間違いを恐れず、積極的に自分の思いや考えを話そうとする姿が見られたものの、より適切な表現を用いることができなかったことが課題として残った。

本校独自のスピーキングテストを先に実施したため、県版のテストはまだ実施していないが、今年度の学習の総括として年度末に実施する予定である。

○由利高校国際科や国際教養大学の学生との交流学習の実施

今年度から実施した校内英語暗唱大会において、国際教養大学より外国人留学生３人に審査員として参加してもらった。由利小学校６年生の児童も参観したが、大会では留学生との交流会を行ったこともあり、小・中学生ともに意欲的に活動に取り組む姿が見られた。

夏季休業中に３年生を対象に、由利高校の教員とのＴＴによる発展的な内容の学習会を実施した。英検準２級の問題を用いるなど、特に上位層の生徒の興味・関心を高めることができ、高校の英語学習への接続を生徒にも意識させるよい機会となった。高校教員による指導は生徒にとってたいへん新鮮で、高校受検に向かう姿勢や学習意欲の向上につなげることができた。

今後は、由利高校国際科の生徒との交流授業を年数回実施し、中学校での学びが高校でどう生かされていくのかなど、先輩の生の声を聞かせ、よい学習モデルとして提示できるように、高校と連携を深めていきたいと考えている。

第二年次　○年間指導計画とＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標の見直し
○４技能を統合した学習題材、教材の開発と実践
○生徒の英語に対する意識調査及び分析
○中学校３年生英語授業でのティームティーチングを活用した授業実践
○ＡＬＴ及び外国人講師の効果的な活用の工夫とＩＣＴ化の推進
○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）
○秋田県版スピーキングテストⅠ・Ⅱの実施及びその検証と活用（９月、２月）
○由利高校国際科や国際教養大学の学生との交流学習の実施

第三年次　○年間指導計画とＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標の見直し
○４技能を統合した学習題材、教材の開発と授業実践
○生徒の英語に対する意識調査及び分析
○中学校３年生英語授業でのティームティーチングを活用した授業実践
○ＡＬＴ及び外国人講師の効果的な活用の工夫とＩＣＴ化の推進
○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）
○秋田県版スピーキングテストⅠ・Ⅱの実施及びその検証と活用（９月、２月）
○由利高校国際科や国際教養大学の学生との交流学習の推進

第四年次　○４技能を統合した学習題材、教材の開発と授業実践
○生徒の英語に対する意識調査及び分析
○中学校３年生英語授業でのティームティーチングを活用した授業実践
○ＡＬＴ及び外国人講師の効果的な活用の工夫とＩＣＴ化の推進
○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）
○秋田県版スピーキングテストⅠ・Ⅱの実施及びその検証と活用（９月、２月）
○由利高校国際科や国際教養大学の学生との交流学習の推進
○４年間の取り組みの検証とまとめの冊子の制作

【由利高等学校】

第一年次　○小学校及び中学校との連携による１０年間を見通した目標設定及び教材開発

小・中学校との連携においては、相互の授業参観及び研究協議会が実施されたが、まだ端緒についたところであり、今後を見通した目標設定や教材の開発はこの後の課題である。

○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）

外部検定試験として英語検定の受験を奨励している。１年生は、全員が１月下旬の第３回英語検定を全員受験することにしており、冬季休業中の補習授業で英検対策を実施している。一次試験と二次試験の結果を分析し、検証結果を今後の指導に反映させたい。本事業の研究校の指定を受けたことにより、英検が特別検定料で割安に受験できることになったため、全員受験に対する保護者の理解が得やすくなり、研究環境が整ってきた。

○スピーキングテストの実施及びその検証と活用

今年度からスピーキングテストを１・２年生の全クラスで実施しているが、校内で統一された形式ではない。教師間の情報交換を十分に行うなど、改善の余地がある。

○年間指導計画とＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標の見直し

今年度の年間指導計画とＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標は本事業を見越して作成されたものにはなっておらず、来年度分の見直しが必要である。特にＣＡＮ－ＤＯリストに関しては、由利中学校のＣＡＮ－ＤＯリストとのすり合わせを行い、中・高の連携を強めたものにしたい。

○国際教養大学の学生との交流の促進

国際教養大学生との交流は２月に実施予定である。

第二年次　○音声指導等における目標達成度の確認、評価方法における妥当性の検証と継続的な改善への協力
○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）
○スピーキングテストの実施及びその検証と活用

○年間指導計画とＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標の見直し
○国際教養大学の学生との交流学習の推進

第三年次　○カタカナ英語の日常生活における使用度の把握と、それらを最大限にコミュニケーション活動に応用した英語語彙力増強のための活動実践への協力
○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）
○スピーキングテストの実施及びその検証と活用
○国際教養大学の学生との交流学習の推進

第四年次　○４技能を統合し、過去４年間における個の伸長度合い及び対象学年における目標達成度を確認できる評価方法の共同開発
○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）
○スピーキングテストの実施及びその検証と活用
○国際教養大学の学生との交流学習の推進

（６）評価計画（平成２６年度の進捗状況・課題）

【由利小学校】

第一年次　○児童の意識調査及び教師による評価の実施（学期ごと）

学習意識調査は、学期末に１回ずつ行った。授業評価も２学期より実施した。学習意欲に関しては、各学年ともほぼ１００％の児童が「外国語活動（６年生は教科型）の学習はとても楽しい・楽しい」と回答している。学級担任の他にＡＬＴやイングリッシュサポーターが指導に関わることで、ネイティブの発音に触れ、英語を学ぶ楽しさを実感できたことによるものと推測される。

教科型においては、何を評価するために、どういう評価項目が妥当であるのか、再検討が必要である。今年度は、６年生の教科型も文章記述による評価としたが、数値による評価とも比較・検討していかなければならない。今後、年間指導計画及びＣＡＮ－ＤＯリストを一層改善させ、それに基づいた適切な評価ができるようにしていきたい。

○研究授業の実践（研究授業７月、１０月）

今年度は５回の授業研究会を実施した。

①指定校訪問　７月（５年外国語活動）、１０月（６年英語科）
②市の授業公開　１１月（５年外国語活動）
③由利地区授業実践交流会　１２月（６年英語科）
④国際教養大学の留学生との交流授業の提示　１２月（６年英語科）

５回の授業研究会を行い、うち２回は近隣の学校の先生も参観した。教科型の授業を提示したことで、今後の小学校における外国語活動及び英語科の指導の方向性の一端を理解してもらえたと感じている。今後は、市内全校に本校の取組を紹介しながら、地域全体に研究の成果を波及していきたい。

また、授業後の研究協議会においては、アクティビティに入る前の練習の時間や「何を言うべきか」についての説明が不足しているという指導を受けた。教科型になった場合、外国語活動と異なり「既習事項をどう生かすか」ということが授業を組み立て

る上で大きなポイントとなる。言い換えれば、「子どもがどれだけ過去に習った英語を使えるか」ということであり、教師が話を広げてあげること、文法的に正しくなくてもそれを教師が既習表現を用いて言い換えてあげることが大切となる。今後は、目的をもったアクティビティを意識した授業の構築についてさらに研修を深めたい。

○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）
○パフォーマンステスト等を活用した評価の実施（学期ごと）
　ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（パフォーマンステスト等も含む）は２学期から実施し、研究の緒に就いたところである。今年度は評価項目の妥当性を検証するまでには至らなかった。由利中学校あるいは先進校の実践を参考にし、できるだけ早い段階で年間指導計画及びＣＡＮ－ＤＯリストを改善し、それを基にした適切な評価ができるようにしたい。

○近隣校や保護者への授業公開（１０月）
○保護者へのアンケート調査の実施（２月）
　今年度実施した５回の授業研究会の内、２回は近隣小・中・高等学校の教員も参加した。保護者には、４月のＰＴＡ総会で本事業の趣旨や本校の英語教育の推進について説明する場を設けた。７月のＰＴＡ参観日では、６年英語科の授業を参観してもらった。１月末に保護者アンケートを実施し、本校の英語教育への取組について保護者の意見を聞き、次年度の計画に生かしていく。

第二年次　○児童の意識調査及び授業評価の実施（学期ごと）
○研究授業の実践とティームティーチング授業の評価（研究授業６月、１０月）
○交流学習の実践とその活動の評価（学期ごと）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）
○パフォーマンステスト等を活用した評価の実施（学期ごと）
○近隣校や保護者への授業公開（１０月）
○保護者へのアンケート調査の実施（２月）
第三年次　○児童の意識調査及び授業評価の実施（学期ごと）
○研究授業の実践とティームティーチング授業の評価（研究授業６月、１０月）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）
○パフォーマンステスト等を活用した評価の実施（学期ごと）
○近隣校や保護者への授業公開（１０月）
○保護者へのアンケート調査の実施（２月）
第四年次　○児童の意識調査及び授業評価の実施（学期ごと）
○研究授業の実践とティームティーチング授業の評価（研究授業６月、１０月）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）
○パフォーマンステスト等を活用した評価の実施（学期ごと）
○近隣校や保護者への授業公開（１０月）
○保護者へのアンケート調査の実施（２月）

【由利中学校】

第一年次　○生徒の意識調査及び生徒による授業評価の実施（学期ごと）

意識調査はこれまでに２回実施しており、３学期に年度の最終調査を行う予定である。第１回調査と第２回調査の結果から、「英語を聞いてどの程度内容が分かりますか」という設問において「ほとんど分かる・ある程度分かる」と回答した生徒が７４％から７９％に向上したことで、オールイングリッシュによる授業実践の成果が徐々に表れてきていると言える。「英語を使ってどの程度書くことができますか」という設問については「書けないところがある」と返答した生徒が３２％おり、他の技能と比較して苦手意識をもつ生徒が多く見られた。

○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）

第１回英語検定では前年度を上回る人数が受験し、合格状況は１７人中１３人で、合格率は７６．５％であった。第２回検定は１・２年生の合格率が７５％で、昨年度の５７．９％を上回る結果であった。また、この検定は３年生全員が受験したが、３級から準２級の上位級を受験する生徒が昨年度よりも多かったこともあり、全体合格率は３１．９％となった（昨年度３７．８％）。第３回試験は１・２年生の約半数の生徒（４５％）が受験を希望している。

○秋田県版スピーキングテストⅠ・Ⅱの実施及びその検証と活用（９月、２月）

３年生で実施したテーマは「自分にとって最も大切なもの」で、教科書の題材で扱われているお絵描きイベントをＡＬＴと１対１で実際に体験した。間違いを恐れず、積極的に自分の思いや考えを話そうとする姿が見られたものの、より適切な表現を用いることができなかったことが課題である。本校独自のスピーキングテストを先に実施したため県版のテストはまだ実施していないが、今年度の学習の総括として年度末に実施し、生徒の話す力の検証を進めたい。

○定期テスト、パフォーマンステスト、県学習状況調査等の結果の検証と活用（学期ごと／県学習状況調査１２月）

定期テストの結果を受けて行った補充学習は、今後も継続していく。県学習状況調査については、通過率の低かった設問を授業で取り上げて回復を図ることはもちろん、誤答を分析して、今後の授業改善につなげていきたい。パフォーマンステストについては、ビデオ等に記録し、一人一人の変容を蓄積して評価に生かしたり、次年度の当該学年にモデルとして提示したりするなど活用を図りたいと考えている。

○研究授業の実践とティームティーチング授業の評価（研究授業７月、１１月）

７月と１１月に実施した授業研究会においては、ティームティーチングを活用し、話すことに焦点を当てた学習活動を行った。得意な生徒のみならず、得意でない生徒も熱心に取り組み、達成感や成就感を感得する姿が見られた。また、フォニックスの指導の効果や、英語で主体的に情報発信しようとする意欲の向上が見られた。授業後の協議会では、「オールイングリッシュの授業を先取りして実践している姿勢がすば

らしい」「他教科の教員とのＴＴは、自分が学んできだ経験を生かし生徒と共感的な関係が築けるなどメリットが大きい」などの指導助言をいただいた。課題としては、教師と生徒のオーラルインタラクションを増やす活動を工夫することや正確なアウトプットを生み出させる学習活動の設計が必要であることなどが挙げられた。

○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）

ＣＡＮ－ＤＯリストを基にした評価の一例を挙げると、７月にＡＬＴの協力のもと実施した３年生のスピーキングテストでは、Ａ評価（十分達成）の生徒が全体の３７％（４６人中１７人）、Ｂ評価（おおむね達成）の生徒が６３％（４６人中２９人）であった。生徒による自己評価は、Ａ～Ｃの３段階で行っているが、ほとんどの生徒がＡ評価であった。このことから、教師側の評価と生徒自身の評価には捉え方に差があることが分かる。ＣＡＮ－ＤＯリストの活用に関しては、生徒への説明や結果の提示の仕方等について再検討する必要がある。話すことや読むことがメインの授業では、ほぼ全員の生徒がＡ評価で振り返るが、書くことを主に扱う授業ではＡ及びＢ評価で振り返る生徒が７割程度であり、どの学年でも共通して書くことに対する苦手意識が高いことも分かった。

今後は、生徒がどの技能においても「できるようになった」と達成感を得ることができるようにするため、基礎・基本の定着を図るための学習活動を工夫し、評価方法も改善していきたい。また、小学校との一体型リストを年度内に完成させ、次年度の評価に生かす予定である。

第二年次　○生徒の意識調査及び生徒による授業評価の実施（学期ごと）
○外部検定試験受験結果の検証と活用（７月、１１月、２月）
○秋田県版スピーキングテストⅠ・Ⅱの実施及びその検証と活用（９月、２月）
○定期テスト、パフォーマンステスト、県学習状況調査等の結果の検証と活用（学期ごと／県学習状況調査１２月）
○研究授業の実践とティームティーチング授業の評価（研究授業６月、１０月）
○小・高校生との交流学習の振り返りと連携の在り方の検証（教師評価）（学期ごと）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）

第三年次　○生徒の意識調査及び生徒による授業評価、英語推進活動の評価の実施（学期ごと）
○秋田県版スピーキングテストⅠ・Ⅱの実施及びその検証と活用（９月、２月）
○定期テスト、パフォーマンステスト、県学習状況調査等の結果の検証と活用（学期ごと／県学習状況調査１２月）
○研究授業の実践とティームティーチング授業の評価（研究授業６月、１０月）
○小・高校生との交流学習の振り返りと連携の在り方の検証（教師評価）（学期ごと）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）

第四年次　○生徒の意識調査及び生徒による授業評価、英語推進活動の評価の実施（学期ごと）
○秋田県版スピーキングテストⅠ・Ⅱの実施及びその検証と活用（９月、２月）
○定期テスト、パフォーマンステスト、県学習状況調査等の結果の検証と活用（学期ごと／県学習状況調査１２月）

○研究授業の実践とティームティーチング授業の評価（研究授業６月、１０月）
○小・高校生との交流学習の振り返りと小・中・高の連携についてのまとめ（２月）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）
○研究の成果をまとめた冊子の制作（１２～３月）

【由利高等学校】

第一年次　○小・中学校での言語活動に基づく高校での言語活動の在り方及び小・中学校での言語活動の評価方法についての調査研究

小・中学校との情報交換会を定期的に開催することで連携を強化する必要性を感じる。また、本事業を円滑に、かつ実り多いものにするためには、校務分掌内での位置付けを明確にしたい。

○スピーキングテストの実施及びその検証と活用

中学校で実施されているスピーキングテストの内容と評価方法について高校側は研究不足である。高校の学習への連結がスムーズに進むように、中学生が慣れている言語活動について研究し、その流れを高校でも切らさずに受け継ぐ必要がある。

○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）

ＣＡＮ－ＤＯリストを生徒が自己評価に活用しやすいものにしたい。そのためには、チェック項目をより具体的なものにし、使われている文言も平易な言葉にして親しみをもたせたい。

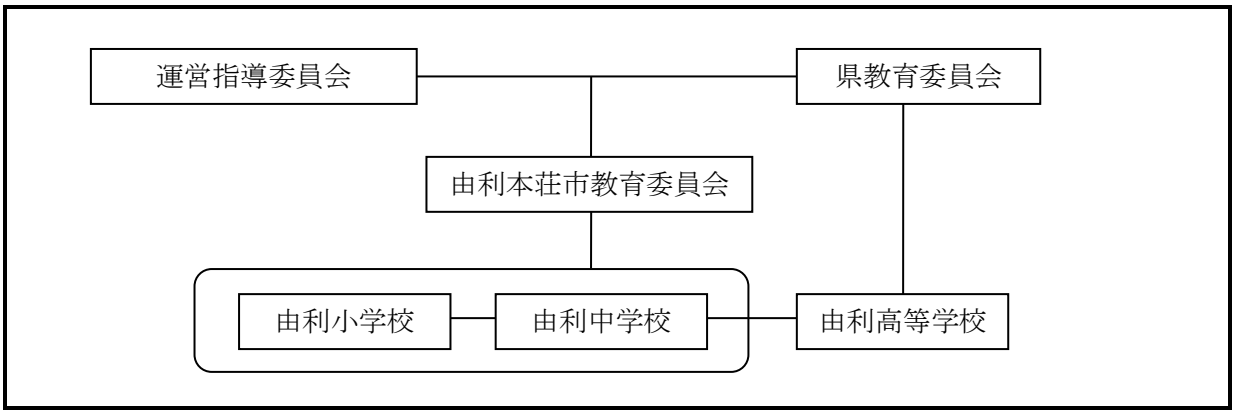
第二年次　○「めあて→自力解決→学び合い→まとめ→振り返り」を取り入れた英語の授業の在り方についての調査研究（学期ごと）
○スピーキングテストの実施及びその検証と活用（学期ごと）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）

第三年次　○小学校段階からの外国語学習を視野に入れた高等学校におけるＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標リストの改善・運用（学期ごと）
○スピーキングテストの実施及びその検証と活用（学期ごと）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）

第四年次　○由利中学校出身生徒と他校出身の生徒間における４技能習得の差違に係る調査研究
○スピーキングテストの実施及びその検証と活用（学期ごと）
○ＣＡＮ－ＤＯリスト形式の学習到達目標を基にした評価（学期ごと）
○研究の成果をまとめた冊子の制作（１２～３月）

４．研究組織

（１）研究組織の概要（平成２６年度の進捗状況・課題）



（２）運営指導委員会

活動計画（平成２６年度の進捗状況・課題）

○小学校、中学校においては年に複数回、高等学校においても年１回以上の授業研究会を開催し、仮説の実施を主とした授業展開等について検証を行い、県教育委員会や運営指導委員が助言する。授業研究会では、実践事例や評価方法の紹介を行い、４技能の総合的な育成が行われているかどうかについて話し合い、指導力を高め合う研修の場とする。その際、教育課程を変更している小学校においては、指導方法とその学習効果について、綿密な調査を行う。

年度の終末では、１年間の総括を行い、次年度の取組を見直し改善を図る。

→　授業研究会では、研究校の教員が互いに授業を見合い、研究協議会においても活発な意見交換が行われた。また、運営指導委員にもほぼ毎回授業研究会に参加していただき、具体的な指導助言をいただいたことはたいへん有益であった。

今年度は、児童生徒のコミュニケーション能力を高めるための指導方法について議論を交わす場面が多かったが、来年度は評価について検討していく必要がある。

今年度の総括は、２月の運営指導委員会で行う。

５．年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
４月	外国語活動担当者による中学校英語授業参観	
５月		
６月	国際教養大学留学生との交流（由利小）	
７月	第１回授業研究会（由利小） 第２回授業研究会（由利中） 校内英語暗唱大会における国際教養大学留学生との交流（由利中）※由利小６年生も参観	第１回運営指導委員会 授業研究会での指導助言
８月	第１回英語指導に関する実技研修（由利小）	
９月		

10 月	スピーキングテストの実施と結果分析（由利中） 第３回授業研究会（由利高） 由利小授業研究会指導案検討への協力（由利中） 第４回授業研究会（由利小） 大阪堺市教育委員会学校訪問における英語活動参観授業への由利中２年生の参加 京都光華学園公開授業研究会視察	授業研究会での指導助言
11 月	第５回授業研究会（由利中） 由利本荘市授業公開（由利小） 第２回英語指導に関する実技研修（由利小）	授業研究会での指導助言
12 月	由利中学校区小・中授業実践交流会（由利小） 国際教養大学留学生との交流（由利小・２回実施） ※内１回は交流授業提示	交流授業への指導助言
１月	第３回英語指導に関する実技研修（由利小） 国際教養大学訪問（由利中）	
２月	中学校英語教員による由利小への出前授業 国際教養大学留学生との交流（由利小・由利高） 県教育研究発表会での情報提供「小学校における英語教育の充実に向けて」（由利小） 全国小学校英語活動実践研究大会神奈川大会視察 第３回英語検定試験結果の分析・検証と活用 スピーキングテストの実施と結果分析	第２回運営指導委員会
３月		
【その他の取組】※あれば記入		

〈本事業担当連絡先〉

都道府県教育委員会名	秋田県教育委員会　高校教育課 担当（珍田）
連絡先　（電話番号） （電子メール）	代　表：０１８－８６０－５１６１　（内線） 直　通：０１８－８６０－５１６８ E-mail：koukou@pref.akita.lg.jp